

「芸術歌曲の伴奏法に関する研究」 ～詩と音楽の融合、その独自性からみる演奏解釈～

教科・領域教育学専攻

芸術系（音楽）コース

M07218G

山岸 多恵

1. 研究の動機と目的

「伴奏」という言葉は非常に消極的な役割をイメージさせる。しかしどの演奏形態（独奏かアンサンブルかの差異など）においても伴奏の重要性は明らかである。特に芸術歌曲のピアノパートにおいては詩と音楽の融合によりあらゆる世界を表出する重要な役割を担っていることは言うまでもないだろう。筆者はさまざま演奏形態のピアノ伴奏を経験する中で芸術歌曲の伴奏は言葉が絡むことにより、他の形態の伴奏とは違った観点の表現方法や要求が与えられていることを認識した。アンサンブルという点においては歌手とのコミュニケーションも必要不可欠であるが、音楽様式や表現内容をふまえた上での伴奏法とは何かを追求していくうちに、言葉のニュアンスや意味や内容の変化がピアノパートがいかにか影響を与えているのだろうか、また言葉で表現できない内的な変化をピアノパートが具体的にはどのように対応しているのだろうかなどといった様々な疑問や問題に遭遇した。

本研究では芸術歌曲の理解を深め、また一方で時代とともに発展を遂げたピアノ奏法や構造上での側面も考慮しながら多角的に研究し、そこから楽曲のスタイルや内容に合わせた伴奏法を見出すことを目的としている。

2. 論文の構成

はじめに 本研究の概要

第1章 芸術歌曲の歴史と伴奏の概念

第1節 芸術歌曲の変遷

第2節 鍵盤楽器の変遷

第3節 伴奏の役割

第2章 芸術歌曲における詩の分析

第1節 ドイツ歌曲における詩の分析

第2節 フランス歌曲における詩の分析

第3節 日本歌曲における詩の分析

第3章 芸術歌曲の楽曲分析

第1節 ドイツ歌曲における楽曲分析

第2節 フランス歌曲による楽曲分析

第3節 日本歌曲における楽曲分析

第4章 分析結果から考察した芸術歌曲の演奏解釈および伴奏法について

第1節 ドイツ歌曲における伴奏法

第2節 フランス歌曲における伴奏法

第3節 日本歌曲における伴奏法

研究のまとめと今後の課題

3. 研究の概要

詩の内容における場面や心象描写の変化の瞬間や音楽上の転換点を本論文では転換ポイントと記している。研究を進める中でこれらの転換ポイントに演奏のヒントがあることを確信した。抽象的に思える演奏解釈や表現を

それぞれの転換ポイントを抽出し分析することにより、転換時におこるピアノパートの役割や演奏解釈を具体的なものへと決定づけた。

元来、言葉には律動や抑揚があり、言葉も音楽と同じ要素を持っていると考えることができる。詩が音楽に文学的な意味を与えるのと同時に音楽は詩の表情を新たな形で表現することができる。その意味において、芸術歌曲はまさに詩と音楽が高次元で融合した表現体であるといえるだろう。歌曲の本質は詩がどのような言語であるかによって関わるため本研究ではドイツ歌曲、日本歌曲、フランス歌曲のいくつかの特徴的な作品について考察をした。「歌曲」の本質的意味から民謡、流行歌、カンタータ、オラトリオ、オペラのアリア以外の独唱曲に限定し考察した。

ドイツにおいて詩や文学の分野で 18 世紀に盛んであったロマン主義は音楽の分野では 19 世紀の半ばに浸透する。ドイツ歌曲についてはこのような過渡期にリート歴史において画期的な影響を及ぼしたシューベルトの作品（『冬の旅』より）を取り上げた。注目すべきもう一つの点は、ピアノの出現、進化、普及によりピアノパートに表現力の拡大がみられ、かなりの重要な役割が与えられたことである。これにより詩節と音楽のフレーズの構造の区分が一体化されているだけでなく音楽により多くの詩の内容が拡大された。このようなデフォルメを示す代表的な作品としてシューマンの作品（『詩人の恋』より）を取り上げ分析を行った。

フランスにおいては 19 世紀の後半の写実主義時代の高踏派や象徴派の時代に詩と音楽の融合が確立したと考えられる。フランス語本来のアクセントやイントネーションのデク

ラマチオンがリズムを自由にのせ声楽パートの旋律線をつくり出す。音楽の形式はピアノパートによって示されているとも言えるだろう。フランスの写実主義、また民族の国民性を念頭に置きながら本研究では創作の中心が歌曲や室内楽であったと考えられるフォーレの作品について分析を行った。

日本歌曲においては、日本語独自の伝統的な音の感覚や音調などに伴う音楽構造を持たせながら、西洋からの影響と日本独自の特徴を交差させ発展し、生み出された作品も多いと考えられる。日本歌曲においてはこれらの特色を生かした作品を数曲選出し分析を行った。

4. まとめと今後の課題

さまざまな転換ポイントを中心に作品の分析や解釈を行うことにより詩や楽曲の内容の理解を深めることができた。これらの理解が演奏の質に関わると確信している。

現存する芸術歌曲において、あらゆる諸国の作曲家の作品の数は、はかり知れない。さらに新手法を施した屈指の作品は現在も進行形で生まれている。その意味においても本研究はわずかな作品を取り上げたほんの入り口にすぎない。本研究で取り上げた作品についてのさらなる探求に加え、今後も多種にわたる作品を積極的に取り上げ芸術歌曲の本質を追究していきたいと考えている。そして今後の演奏表現に役立て、演奏解釈の研究を深めながら、演奏の質の向上に努めたい。

主任指導教員 草野次郎